

シモーヌ・ヴェーユにおけるデカルト的自由意志

——社会的労働との関連から——

井 上 正

序

シモーヌ・ヴェーユの思想、および行動の転機を指摘する論考は数多い。それらは、概ね当を得たものであり、現在では、ほぼ通説となっているのであるが、一思想家の姿勢がどのように転回したかという記述のみならず、その転回の意義が問われなければならないであろう。

シモーヌ・ヴェーユがラディカルな政治参加から出発し、被抑圧者の解放のための実践、呼びかけを行い、多くの論者を著した後、次第に内省的、神秘的な傾向、禁欲的な実践に移って行ったことは周知の事実である。

この転回に、シモーヌ・ヴェーユの〈弱さ〉および〈ニヒリズム〉を見ることによって、彼女の限界を批判する著作がいくつかある。

たとえば、アレッサンドロ・ダル・ラーゴ (Alessandro Dal Lago) は、「弱さの倫理—シモーヌ・ヴェーユとニヒリズム」⁽¹⁾の中で、ヴェーユの禁欲的傾向への転回を「現状にそぐわない、〈思想〉の限界」であると述べ、「現状にそぐわないと上に述べたのは、文化の壊滅の自覚から出発したシモーヌ・ヴェーユが、世界の運命に対し、自分自身の生存を開示・説明するという孤独な道を選んだからである。」⁽²⁾と言っている。

シモーヌ・ヴェーユが次第に、社会を悪であると規定し、集団が必ず抑圧を生み出すと判断して、いかなる党派からも離脱したという文脈から把

えられている。

ダル・ラーゴは、これが、〈弱さ〉と〈ニヒリズム〉であるという判断を行っているのであるが、そのように断定するには、ヴェーユの意志と行動に関する論考を十分に吟味する必要がある。

彼によれば、この〈弱さ〉は意志の〈弱さ〉である。しかし、シモーヌ・ヴェーユは、〈不可能性〉というものに宇宙の必然を看破し、この必然は神が人間との間に置いた無限の距離であり、且つ、神の痕跡であると直感した。さらに、人間は、この必然への自発的同意により、この距離を破るのだと彼女は考えたのであるが、これをダル・ラーゴは、「シモーヌ・ヴェーユによれば、不可能性は弱さの条件、悪を放置していることの条件を明示するものである。」と評価し、そこに意志の欠落をみている。⁽³⁾

この種の〈弱さ〉の対極にあるものは一体何であるか。彼は答えていないが、「シモーヌ・ヴェーユの思想は堅固なものではないと言わざるを得ない。」⁽⁴⁾と言ったジョルジュ・バタイユ (Georges Bataille) は迂遠ながらもヴェーユの弱い思想とニーチェの挑戦の倫理について述べている。ヴェーユの「力が弱さの仮面」⁽⁵⁾であったとし、その「さまざまな弱点は、適確な雄弁口調に装われながら、冷ややかであると同時に感動的な、確かに讃歎に値するが、がっかりさせもする性質の、ドン・キホーテ的傾向を証拠だてるものである。」⁽⁶⁾という指摘が、ヴェーユに対する、揶揄の調子を帯びているのに対し、ニューチェについての分析を示す次の文章は、バタイユ自身の指針でもあり、〈強い〉思想を規定するものであって、ヴェーユへのアンチテーゼでもある。

「[ニーチェの心] 心情の酷薄さは、狂暴なうめき声をこえて昂揚し、対決するものとなる時、確固として能動的な、形式を手段と見なす、倫理的な高潔さの水準に達する。[……]それというのも、倫理の究極の真実は挑戦への身の処しかたにあるからである。」⁽⁷⁾

ヴェーユとニーチェとでは義務の履行完遂に至るまでの道が異なるのである。ヴェーユは自発的同意に依拠し、ニーチェは「対決する」ことによって人間の条件を満たそうとする。バタイユは、義務を社会の倫理的要請という方向から捉えているのでニーチェに比重がかかるのであるが、義務を人間の本性的、あるいは超本性的な要請と見る、カント的あるいは神秘的視点に立った場合、ヴェーユの意志について、強／弱の二項対立的な価値のレベルを持ちこんだところで何か明らかになるものがあるだろうか。

ヴェーユにおいて「生きる理由」の理念型は「世界にわれわれの意志の刻印を押すこと」⁽⁸⁾であり、それをおし潰す〈必然〉についてどう処すべきかを問うのであって、必然の抗い難い力の磁場に自らの場所を限定している。既に身動きならぬ場にあつて、「我れ」の意味を問うのであり、「何をなしうるかを」問うのである。その磁場の外では、彼女は苦渋の思索を重ねるよりもむしろ直接の行動に赴くのはペトルマン(Simone Pétrement)、カボー(Jacques Cabaud)の評伝が示すとおりである。

ヴェーユの〈転回〉についてつぎのように問うてみる事が可能であろう。すなわち、主体を世界に刻印させようとする意志が、過大な抵抗である〈必然〉を通じて、自らの質を変化させる際にいかなる内的必然があったかという事である。シモーヌ・ヴェーユは思惟というミクロコスモスから出発したのであるが、次第に、これと大宇宙とのかかわりに関心が移って行ったように思われる。このかかわりへの論点の移行に応じたかたちで彼女の意志論および意志の行使が変化していったのではないかと見るのであるが本稿ではこれを明らかにしたい。

1. デカルト的自由

〈意志〉を行使するための与件として、〈自由〉が措定されていなければならないという前提は、おそらく、シモーヌ・ヴェーユを見る場合にはあ

まり意味がないであろう。少なくとも、彼女の工場体験以降は、意志行使の不可能性が問題となってくるのであり、自由が極端に制限されている地平での〈意志〉こそ彼女が最終的につきつめて考えるところではないだろうか。

しかし、目ざすものは、〈自由〉である。完全な自由はあり得ないが、“vision”の設定が必要であろう。ヴェーユと同時代のミリタンたちが、この設定をユートピア的であるとして斥けたことから方向性を失ったのに対し、ヴェーユは常に、何が人間の条件であるかを見据えていたのであって、この〈条件〉と、〈必然〉が調和する均衡点を摸索することが、彼女のライフ・ワークであった。

ヴェーユが生きた1930年代は、自由が加速度的に制限されていく時代であったが、そのなかでヴェーユは次のように考える。

「…人間が自由のために生まれたと感じるのを世界上の何物も妨げることはできない。何が生じようとも、人間は決して隷従を受け容れることはできない。けだし、人間は思考するからである。」⁽⁹⁾

あまりに素朴な提言であるが、人が思惟するかぎり隷従はあり得ないというカルテジアン的な出自は、後の彼女の思想および行動を見る場合に、その深化発展の核としてこれをふまえておく必要があると考えられる。

完全な自由を可能にするものは、世界の「非決定」(l'indifference)であるとヴェーユは考える。

すなわち、可能態である。この可能態が十全であるような領域は、cogitoの領域であろう。

ヴェーユは一旦、これが動かしがたいものであり、確実なものであるとして、ここに拠点を据えておくのである。

「我思う」ゆえに「我なしうる」ということを疑いのない真実として確

認するところから、彼女の思想の *Entwicklung* が始まると見てよい。

当然、この完全な自由に対立するものをパースペクティブに把えなければならぬ。「人間が生きる限り、すなわち、人間が、この無慈悲な宇宙の無限小の断片である限り、必然の圧力は一瞬たりとも緩められないであろう。」⁽¹⁰⁾とヴェーユが述べる時、自由に対立するものの本質を見据えていたことになる。

必然の相（あるいは層）は、多様であるが、初期のヴェーユにあっては、社会的抑圧がその一つの局面をなしていた。

社会的抑圧が必然性の一つの局面であるという認識をもったのは、初期においては、同時代の歴史的 analysis を通じてであるが、のちにこの認識は、工場体験によって痛切な確信となった。

こうした抑圧の歴史的 analysis に基づく自由の摸索以前に、デカルト的自由へのヴェーユの思い入れがあったということを見ておきたい。

ヴェーユが、「〈自ら設定した目標〉と〈その目標に至るための適性な諸手段相互の連鎖〉とに關しての予めの判断からの行為が生じるであろうようなそうした人間は全く自由である。」⁽¹¹⁾と述べる時、デカルトの方法的思惟が考慮に入れられていることは明らかであろう。シモーヌ・ヴェーユによれば、方法的思考を十分に行うということは、自由意志を行使していることになる。この方法的思考は彼女がデカルトから学んだものであり、ディプローム論文〈〈Science et perception dans Descartes〉〉において、彼女はこの科学的思惟方法の批判を試みているが、更に「抑圧と自由」のなかで、この方法をどう把握すべきか、〈あるべき科学〉とのかかわりから述べている。

「かつてデカルトは、神秘のない科学を創設したのだと考えていた。これはどういう科学かという、最も複雑な諸部分が最も単純な部分より単に長いものだというにすぎず、それほど理解が困難だというわけではない

ようにするために、方法のなかに統一性と単純さが十分にあるような科学である。〔……〕また、児童が新たに科学を創設するのだという感じを持てるように、結果を発見するまで導くような方法で各結果が与えられる科学である。」⁽¹²⁾

従って、「方法叙説」に見られるように、単純から複雑に向かって〈理性が導く正しい筋道〉に沿って思惟し、且つ、これに領導されて行為を行うという実践の可能態が自由であるとヴェーユは見るのであり、先程の思惟の端的な自由から見方を一步すすめたことになる。

それでは、デカルトの第三準則、すなわち、「もっとも単純でもっとも認識しやすいものから始めて少しずつ、いわば段階を追ってもっとも複雑なものの認識に至り、また自然的には相互に後先のない事物の間に秩序を仮定しながら、私の思考を秩序だてて導いていくこと」⁽¹³⁾を日常の行動に適用する意義はどのようなものであろうか。シモーヌ・ヴェーユにおいては、ただわれわれがこうむるだけの受動的必然から、操作された方法的必然への移行が自由への転機となる。方法的必然とは自然に従うことによって、これを自由にあやつることであり、これによって「意識的に方法的に自分自身の生存の条件を再創造すること」⁽¹⁴⁾が可能になるはずである。従いながらあやつるという、〈無限に反復される主—従のいれかわり〉の dialectique がここでは見られる。ヴェーユはいうまでもなく *hégélienne* ではなく、弁証法の体系を排除して、むしろプラトンの均衡の概念を範としたのであるが、彼女の必然／自由の二項関係を超越するために、一旦、ヘーゲルに譲歩するかに見える。

しかし、ヴェーユは体系に封じ込められることを拒み、無限反復の閉塞状況に調停をもたらす契機を探る。もはや乗り越えることのできない *impossibilité* の地点で、なおかつ「世界にわれわれの意志の刻印を押すこと」が目ざされるのであるが、それ以上 *impossibilité* に抗うとかえって所期の刻

印の目的が思わぬ方向に悪化してしまうであろうような、そうした限界点で、必然／自由の均衡を見るのである。必然に盲目的に従うことは、餌を求めて飛ぶ燕のように本能に身を委ねることであり、自由の放棄となるが、逆に完全に意のままに生きようとすれば状況がこれを許さず、生存すら危うくなるのである。

「必然について自ら作り上げる内部表象に従う」⁽¹⁵⁾ことによって「世界にわれわれの意志の刻印を押す」ことが最も有効にはたらくのは労働の地平である。

方法的思惟の行動への適用のケースがここにおいて見られる。彼女がこのケースにどのような意義を認めているかを、以下、考察していくことにする。

労働を完全に物理的なレベルで考えた場合、〈仕事量〉のごとく数量化されうるのであるが、このレベルにおいては、人間の存在を可能にする条件が専ら、「筋肉の努力を方向づける彼の思惟による所産」⁽¹⁶⁾であるならば、その人間は自由であるということになる。これが理想の基本的な核になる。それでは実際の社会的労働の中ではどうであろうか。

上に述べたデカルトの方法的思惟が、分業体制の中にあっても適用され、労働者が自らの作業の、全体にとっての意味を把握し、全体に寄与するかたちで創造的にこれにはたらきかけることができるありかたをヴェーユは理念型としている。彼女が、「自由にとって重要なことは労働が方法的であるということではなくて、労働が方法的に為し遂げられることである。」⁽¹⁷⁾と言う際に意図しているのはこのことである。ユーゴスラヴィアで試みられる労働者自主管理のコンセプトをヴェーユは既にこの時代に見出していた。経済という物質のフローを抽象的にとらえ、これを変革することに終始するだけではなく、絶えず、魂の解放という視点を外さなかったヴェーユの実践論は、「現実的でない」、「科学的でない」として批判されるが、彼

女は目標と方法的実践を混同しているわけではない。方法が専門家によって記号化され、一人歩きをしてあらぬ方向に反れることを避けたいと思うのである。Vision をもたぬ抽象的変革ではなく、労働者が可能な限り自由で有り得る体制に近付くための実践を考えるのであり、これはボトム=アップの発想である。労働者の魂の解放から出発しないいかなる経済理論も改革論も実践も拒否するのである。では具体的に、どのような状態が労働者にとって自由であるか。

「完全に自由な唯一の生産様式は、方法的思惟が労働を通じてはたらいっているような様式である。[……]……労働者は、労働の指導概念を、常に新たになる個々特殊のケースに聡明に適用しうるように、自らが実行する労働の指導概念を精神に常に現前せしめておく義務があるようにしなければならない。」⁽¹⁸⁾

方法的思惟の適用された労働が、自由なる人間の一つの条件であるというのは *définition* の問題であって、われわれの関心は、何故そうなのかというところにある。

自由が達成せられた場合、ヴェーユにおいては、「労働は、これが魂の意図に出来し、この意図に相応する反映に達する限りにおいて、魂と物質の融合を示す」⁽¹⁹⁾と見られる。この場合、物質とは世界である。ヴェーユは、世界と自分との隔絶に常に驚異を覚えていたのであるが、その反作用として、東洋の梵我一如的な、世界への参与に対する願望を持っていたこともたしかである。「アートマン。人間の魂が、宇宙全体を身体として、とらえることが望ましい」とし、「人間は宇宙の魂ではないか？」⁽²⁰⁾と問う彼女は、マクロコスモスとの融合への憧憬を表明している。

思惟する人間は、その限りでは自由である。シモーユ・ヴェーユは、このように、デカルトから出発したのであるが、彼女は単なる思惟では自分

が世界に喰い込むことができないのを自覚していた。刻々と生存し、自らを世界に投げだす実践の地平で、これがなされなければならない。なぜなら、禅僧と異なり、ヴェーユは日々生活し、実践することをやめないからである。ヴェーユは世界に働きかけたいのであり、刻印を見たいのである。思惟はその必要条件にすぎない。

「単に消極的なものにすぎぬ私は、同時に、いかにして世界に喰いこむのであるか。〔……〕盲目的に働きかけるということを決意しなければいけないのか。盲目的に働きかけるということは、働きかけるということではなく、被るということである。私が、方向づけをしない〔能〕力を所有するということは、どんな〔能力〕も行使しないということである。従って、私自身の行為を按配する方法が必要である。」⁽²¹⁾

上の引用でわかるとおり、働きかけは盲目的であってはならない。盲目的であるということは隷従を意味するからである。思惟によって方向づけられた方法によって行なわれることが必要なのである。

その積極的な場を提供するのが労働である。方法的思惟に基づいてなされる労働は、人間と世界の融合の媒介になると考えられる。媒介（メタクシュー）はヴェーユの中心思想の一つであるが、彼女がキリストもまたメタクシューを顕現するものであったとみていたことは示峻的である。彼女において、労働とキリストとはおなじ相のもとに考えられていた。罪のあがないであると同時に、人間と宇宙の仲介となるものである。

「私があるところのものと、私がそうでありたいところのものと、間に、常に何ものかが存在する。すなわち、媒介ということが私固有の律法である。労働というこの律法は、夕べの夢に根拠を与えるものである。」⁽²²⁾

人間が充溢した存在となり、「宇宙と精神の原契約」⁽²³⁾を取り戻すために

は、方法的思惟の保証された労働によるのが最も相応しいということになる。

従って、ヴェーユが1934年に工場に職工として入り、あるいは1941年に農業労働に従事したのは、必然性としては倫理的契機しかもたぬ所謂 engagement によるものでも、まして、bourgeoisie 出身の教授資格者の単なる知的好奇心による思いつきでもなかった。この種の批判はヴェーユの労働観を見落としているといわざるを得ない。労働は、ヴェーユの全身全霊が渴望した行為であり、宇宙から疎外された自己を再創造する宗教的要請であったと考えられるのである。「類まれな喜びと充溢の瞬間において、真の生活がそこにあることがひらめきによって知られ、世界が存在し、自分が世界にいることを全存在をもって感受する」⁽²⁴⁾ことを可能にするものである。諸研究者により、ヴェーユの不幸論が強調されているが、人類の目標として、以上のような幸福論も存在していることを看過すると彼女のニヒリズムや弱さが全面に出てくるのである。彼女にとって人間の一切の行為は上のような vision の設定を前提としなければならない。これをはずれた実践は、盲進して本来の目的を失う可能性がある。

史的唯物論の解釈についても、「思惟する人間が、世界を自らの所有のうちに把える行為のなかで、思惟と世界の接触の際に現われる現実を示すのだという考えかた」⁽²⁵⁾に沿ってなされなければならないとし、彼女の歴史認識も魂の解放という目的を見据えたものであることが示される。

ヴェーユの、芸術・文明に関する価値基準も、すべて、この地点に集れんする。しかし、「われわれは、労働、芸術、科学が、宇宙の神的秩序と接触するためのものであって、その仕方が多様であるにすぎないことを等閑視している」⁽²⁶⁾のであり、このようにわれわれをつまずかせるのは一つに〈技術＝テクノロジー〉のおごりであるということになる。全てを専門化し、記号化することにより、また、分業化・管理組織化することにより、人間が直接、じかに宇宙と接触することが妨げられている。思考するのは

記号体系自体である。最も巨大な、且つ神秘的な記号体系は *bureaucratie* であり、これは、いかなる種類・規模の組織においても社会的抑圧の源泉となるものであり、方法的思惟をはたらかせながらの労働によって個人がパースペクティブな視点を獲得することをさまたげ、宇宙との一体感を持つことを不可能にさせるものである。このような不透明な記号体系を介して、われわれは、意志の刻印を押すことができるであろうか。

ヴェーユはこの問題にこたえるために1930年代の労働の状況を歴史的に把えようとしたのである。彼女の倫理感はここに発生するのであって、シモーヌ・ヴェーユの政治的実践が、知識層の〈労働者指導〉という上からのアプローチであるとする見解は（たとえば、テヴノン夫人の「工場日記」序文）、当を得ていないことになる。

「〈自らの分有である宇宙〉と、そして〈自分と条件が同一である同胞たち〉と、人間にふさわしい諸関係を維持すること」⁽²⁷⁾を可能にする肉体労働が至高の価値となっている文明が最も十全に人間的であるとするシモーヌ・ヴェーユの倫理感をテヴノン夫人は見抜けなかったのであるが、ヴェーユ研究者においても、知りうる限りでは、このことを指摘していない。

そこで、意志の拠点としての自由を保証する労働という理想的な行動形態を、社会がどのように抑圧し、同胞の当時の状況がどのようなであったかについて、ヴェーユの分析をたずね、彼女が自由の限界をどのように歴史的に把握したかを見ることにする。

2. 自由の歴史的認識

シモーヌ・ヴェーユの真価が発揮されるのは、上に述べたように、「何が人間の条件であるか」、言い換えると、「何が〈善＝幸福〉であるか」を明確に措定した事であり、体験と直感、および科学的方法を通じて、これを絶対の領域の限界まで突き詰めていったことにこそヴェーユの功績がある。ここに集れんしない一切の思弁、哲学、思想、あるいは実践を彼女は、拒

否するのである。それらは一たび目標をはずれると、無限に軌道を遠ざかるからである。

また、なにが人間にとって善であるかを問うたヴェーユは、不幸なる者がこの道に至る方法を追求する。たとえば、「完全に自由な生活ということになると、全ての実際の困難が、ある種の問題、すなわち、一切の戦勝が、〈実践に移された解答のごときもの〉であるような、そうした、ある種の問題として提示される生活が自由な生活である。」⁽²⁸⁾とし、同胞が、この自由な生活に限りなく近付くための社会分析と実践を行うのであるが、これが彼女の倫理的立場である。上に述べた目的をヴェーユは固持するので、当然、社会的抑圧に阻まれ、限界点で停止する。後に彼女は、この点を宇宙の均衡点とし、ここに、動かし難い必然を認識するのであるが、ダル・ラージュ、バタイユらはこれを弱い倫理であると規定したわけである。彼らは〈不可能性〉を前にした人間の条件については、触れていない。人間が人間であるための条件を死守したがゆえに、〈不可能性〉という限界点で苦悶し、さらに方向性を見出そうとするヴェーユの厳格な倫理感を彼らは理解しないのである。

すでに述べたように、「宇宙との原契約」を結び直し、宇宙との調和のとれた均衡を獲得するという宗教的な人間のありかたを究極の理想とし、そのための一つの媒介として、たとえば、方法的思惟に領導される肉体労働が考えられたのである。

シモーヌ・ヴェーユは、彼女の生きた1930年代においてそのような肉体労働が保証されているか否かという、分析を行う。ただ、徹頭徹尾、科学的な資料批判を通じて既述される歴史学的方法を用いるのではなく、二次資料と自らの体験に歴史哲学的考察を加えるという思想家としての立場をとっている。

この考察をひもとくわれわれの関心は、彼女の自由の観念が、どのようにして、歴史の流れを前にして変容していったかをさぐることにある。

状況のただなかにあつて、シモーヌ・ヴェーユは、方法的思惟の〈不可能性〉を次のように了解した。

「……複雑な事柄が問題である場合に、自分自身で問題を作りあげた時にも、これを適用できない。けだし、注意は常に、実行の現在の瞬間に向かわざるを得ず、それと同時に、実行全体が依拠している諸関係の連鎖をあくまで理解することがほとんどできないからである。従つて、実行されたのは思惟ではなく、一連の運動を示す抽象的図式である。」⁽²⁹⁾

システム化された工場にあつては、工程が高度に分業化され、technocratieの発達によって、ますます、全工程を思惟する必要性が排除され、単純な現在の思考に、労働者は、限定されざるを得ない。流れるのは機械であつて思惟ではない。思惟は、〈現在〉に釘付けにされるのである。

上の引用文が記載されている「抑圧と自由」の執筆時期については、ペトルマンが、1934年の9月から11月までと証言しており⁽³⁰⁾、初めてプレス工としてアルストン社の工場に雇用されたのが同年の12月である⁽³¹⁾から、この文章は、いわば、工場の外側から書かれたものと言ってよく、工場のシステムから推察して書かれたものであるはずである。

従つて、かなり観念的な視点から書かれており、後の工場体験に見られるような、思考を凝固させ、停止させてしまう〈システムの非人間性〉の視点はまだあらわれていない。ただ、「理論的次元の困難に取り組む人は単純から複雑へ、明らかなものから難解なものへ赴きながら、処置を行う。労働者の運動はというと、どちらがどちらより単純か複雑かということはない。そうではなくて、単に先行するものが後続するものの条件となるのである」⁽³²⁾とし、フローチャート式にシステム化された工場においてはデカルト的な方法的思惟が排除されるという指摘にとどまっている。デカルトの方法的思惟どころではなく、思惟そのものが破壊され、人間である状

態を完全に逸してしまうという事実を痛みとして知ったのは、工場体験の後である。しかし、ヴェーユの上の推察が正しいとすれば、「自由の具体的定義：行為について考えることが行為に先行する場合」⁽³³⁾のような理念型とは逆であって、自由の場が奪われていることになる。何れにせよ、労働者が〈善＝幸福〉の対極に位置しているということの根拠を物質的レベルとは切り離して、霊的（spirituel）な次元から考えていたのである。

方法的思惟が不可能となり、すべての動作が、自分の思惟以外の源泉から生じるに至った場合、人間は奴隷状態になる。

現実の労働者たちをヴェーユはどう眺めていたかという点、「一挙手一投足が腹わたをねじ曲げるケイレンによって引き起こされる餓えた原始人、鞭で武装した看守の命令に緊張したローマの奴隷、連続工程で作業をする現代の労働者はこの悲惨な状態に近い。」⁽³⁴⁾として、外側からであるにせよ彼らの〈不幸〉に敏感に反応している。

企業という官僚的組織体に固有のメカニズムが、底辺に属する大多数の者の方法的思惟を奪うのであり、生産工程そのものがそれを決定的にする。彼女はこれを安直に景気変動や経済体制の問題に帰するのではない。景気や体制の如何を問わず、社会が本質的に分泌する、免れようのない抑圧が存在するのであり、集団による生産そのものの問題であると考えてのである。組織体は、全体を調整する機能を生み出さざるを得ず、方法的思惟は全て管理職が行うことになる。

職場単位の小規模な管理体制こそ問題であり、ヴェーユは、管理という職能が恒久的なものである限り、これが所有の独占とは別に、新しい抑圧の階層を生起させないものだろうかと問うのである。経済政策により、景気が安定し、労働者が相応の労働時間、賃金、福利厚生を享受している間は、管理による抑圧の構造は隠蔽される。しかし、依然として、方法的思惟は底辺の者から奪われたままである。

ヴェーユの権力論はすでに常識的・通説的見解になってしまったが、「人

間と自然との真の諸関係を明らかにする」⁽³⁵⁾ために、今日のわれわれの時代への提言とも取れるヴェーユの抑圧論は彼女の真価を示すものであり、「労働者に単なる訓練ではなく、技術に関する十全な知識を与えることによって、肉体労働に本来の権利としての尊厳を与えたいのであり、労働の媒介を通じて知性を世界と接触させることによって、知性に固有の目的を与えたいのである」⁽³⁶⁾と言う時、労働者の真の、知的、宗教的、文明的解放をめざすラディカルな申し立てを半永久的に行っていると考えられるのである。

目標は設定された。では、どうすればいいのか。

まず、第一歩は、「労働の魂そのものを〈方法〉が構成するのを妨げない」⁽³⁷⁾という低いレベルから始められるであろう。デカルトからの出発でもある。彼女はレーニンが、デカルトの名前に触れることさえしていないのは、意義深いとしているのは、こうした意味においてである。⁽³⁸⁾

次に考えられるのは、生産組織である。シモーヌ・ヴェーユは「自然の必然性およびこれに起因する社会的強制を排除するに無力ではあっても少なくとも抑圧のもとで精神および身体を粉碎することなしに必然と強制が作用するのを可能にさせるような生産組織のコンセプトをもちうるかどうかを理解することが問題である。」⁽³⁹⁾と述べ、社会的強制・抑圧は不可避であるとしつつも、労働者の方法的思惟が少しでも行使されるような生産組織の活路を摸索するのである。このコンセプトが敗北主義の汚名を着せられる可能性をヴェーユは十分に諒解していた。現にダル・ラゴ等によって批判されている。しかしヴェーユのめざすものはバタイユのような破壊ではなく、〈思惟する労働者の魂〉の確保であり、〈行動しながら考える責任〉を与えうる場のなしうる限りの提供である。

シモーヌ・ヴェーユは、思想というものが、一方の側に立つ、偏差的なものであること、決定された方向付けしかもたず、プラトンのような均衡を不

可能にするものであることを十分に熟知していた。従って、人間の尊厳のために、これだけは譲れないという〈人間のあり方〉の目標を設定し、その目標をめぐる様々な条件が成立、矛盾、対立するものであるが、その均衡点が、目下、現実的に、〈悪〉が最小限の状態であるとみなすのである。

「……社会的メカニズムの抑圧的重圧を減少させるための、もろもろの必要条件は、一定の限界が越えられると、すぐに相互に対立する。従って、決定された方向にできるだけ遠く進むことなく、はるかにより困難ではあるが、最適条件の一定の均衡点を見出すことである。」⁽⁴⁰⁾

ここにおいて、なし得る限りの自由の場の確保が要請されている。この地平で人間の意志が問題にされ得る。上で見たとおり、この地平は危うく、しかも狭いが、この隘路こそ、シモーヌ・ヴェーユの意志の拠点と考えられる。労働者の方法的思惟を、自由の最低限の条件として、これを可能にする均衡点をもとめるところに、彼女の意志論の存立が見られるのである。

註

- (1) Alessandro Dal Lago: L'etica della debolezza……Simone Weil e nihilismo, in 《Il Pesiero Debole》
- (2) Inattuale, perché a partire dalla consapevolezza dell' annientamento della cultura, Simone Weil ha scelto la strada solitaria dell' esposizione della propria esistenza al destino del mondo,……
op. cit., p.91
- (3) Per Simone Weil l'impossibilità designa una condizione di debolezza, di abbandono al male.
op. cit., p.92
- (4) Il faut dire que la pensée de Simone Weil n' est pas ferme.
Georges Bataille: La victoire militaire et la banqueroute de la morale qui maudit
in Oeuvre Complètes de Georges Bataille tome XI ed. Gallimard, 1988, p.540 (訳は山本 功氏訳を使用。「ジョルジュ・バタイユ著作集」第12

卷 一見書房) 以下同様。

(5) Ibid., p.538

(6) Ibid., p.537

(7) Tandis que la dureté du coeur, si elle brave et s'élève au-dessus de hargneux gémissements, est de plein-pied avec la générosité morale, décidée, active et tenant la forme pour un moyen. [……], car la vérité dernière de la morale est une réponse à un défi.

Georges Bataille: Nietzsche……La théologie et la folie de William Blake

in O. C. de Georges Bataille, tome XI, p.424

(8) Simone Weil: Oppression et Liberté, Gallimard, 1955 [以下, OL と略す] p.138

(9) ……rien au monde ne peut empêcher l'homme de se sentir né pour la liberté. Jamais, quoiqu'il advienne, il ne peut accepter la servitude; car il pense. (OL, p.113)

(10) ……tant que l'homme vivra, c'est-à-dire tant qu'il constituera un infime fragment de cet univers impitoyable, la pression de la nécessité ne se relâchera jamais un seul instant. (Ibid.)

(11) serait tout à fait libre l'homme dont toutes les actions procèderaient d'un jugement préalable concernant la fin qu'il se propose et l'enchaînement des moyens propres à amener cette fin. (OL, p.115)

(12) Descartes avait cru autrefois avoir fondé une science sans mystères, c'est-à-dire une science où il y avait assez d'unité et de simplicité dans la méthode pour que les parties les plus compliquées soient seulement plus longues et non pas plus difficiles à comprendre que les parties les plus simples [……]; où chaque résultat serait donné avec la méthode qui a conduit à le découvrir, de manière que chaque écolier ait le sentiment d'inventer à nouveau la science. (OL, pp.52-53)

(13) Le troisième, de conduire par ordre mes pensées, en commençant par les objets les plus simples et les plus aisés à connaître, pour monter peu à peu, comme par degrés, jusques à la connaissance des plus composés; et supposant même de l'ordre entre ceux qui ne se précèdent point naturellement les uns les autres.

Descartes, Oeuvres et lettres, Bibliothèques de la pléiade, Gallimard, 1953, p.138

(14) Simone Weil, Cahier I, Plon, 1970 [以下, C-1 と略す] p.31

(15) OL, p.115

(16) OL, p.117

(17) C-1, p.39

(18)le seul mode de production pleinement libre serait celui où la pensée méthodique se trouverait à l'œuvre tout au cours du travail. [.....] il faut que le travailleur soit obligé de toujours garder présente à l'esprit la conception directive du travail qu'il exécute, de manière à pouvoir l'appliquer intelligemment à des cas particuliers toujours nouveaux. (OL. p.126)

(19) Le travail, en tant qu'il provient d'une intention de l'âme et de la matière.....

Simone Weil: Le travail et le droit.....le travail comme médiation, in 《Oeuvres complètes de Simone Weil》 Gallimard, tome I, 1988 [以下 CO-1 と略す] p.246

(20) C-1, p.127, p.192

(21) Comment est-ce que [.....], et seulement négative, je mords en même temps sur le monde? Agir aveuglément, ce n'est pas agir, c'est pâtir. Posséder une puissance que je ne dirigerais pas, ce serait n'exercer aucune puissance. Il me faut donc un moyen de disposer de ma propre action.

Où chercher ce moyen? Dans ma pensée.....

Simone Weil: Science et perception dans Descartes.....Diplôme d'Étude Supérieur, 1930 in OC-1, p.199

(22) Il y a quelque chose entre ce que je suis et ce que je veux être; la médiation est ma loi propre. Cette loi du travail est ce qui donne corps aux rêveries du soir.

Simone Weil: Le travail et le droit, OC-1, p.245

(23) OL, p.162

(24) OL, p.137

(25) OL, p.49

(26) OL, p.220

(27) OL, p.138

(28) OL, p.116

(29)S'il s'agit de choses compliquées, il ne le peut, quand il l'aurait élaborée lui-même; car l'attention, toujours contrainte de se porter sur le moment présent de l'exécution, ne peut guère embrasser en même temps l'enchaînement de rapports dont dépend l'ensemble de l'exécution. Dès lors ce qui est exécuté, ce n'est pas une pensée, c'est

une schéma abstrait indiquant une suite de mouvements,(OL, pp. 122-123)

(30) Simone Pétrement: La Vie de Simone Weil, tome II, Fayard, 1973, p.7

(31) Ibid., p.20

(32) OL, p.122

(33) C-1, p.34

(34) OL, p.116

(35) OL, p.33

(36) OL, pp.32-33

(37) OL, pp.118-119

(38) OL, p.48

(39) OL, p.80

(40)les conditions nécessaires pour diminuer le poids oppressif du mécanisme social se contrarient les unes les autres dès que certaines limites sont dépassées; ainsi il ne s'agit pas de s'avancer aussi loin que possible dans une direction déterminée, mais, ce qui est beaucoup plus difficile, de trouver un certain équilibre optimum. (OL, p.136)